〔和漢三才圖會三天象〕霜音蒼　霰音店　早霜也和名八豆之毛　本綱、陰盛則露凝爲霜、霜能殺物、而露能滋物、性隨時異也、月令云、季秋霜始降、五雜俎云、百草不畏雪而畏霜、蓋雪生於雲陽位也、霜生於露陰位也、不畏北風而畏西風、亦蓋西轉而北陰未艾也、北轉而東陽已生也、○中略　按、霜雪將降日甚寒冷、既降後必暖也、自立春八十八日、則當立夏前五六日、俗稱八十八夜餘波霜、凡草木畏霜、如蘭番蕉佛手柑以下柑橘之類、覆蔫禦霜、過此日則脫蓋、

〔八雲御抄三上天象〕霜　はつ　朝　夕　はたれ薄垂　ゆふこり夕凝中略○　つるのいましめ　かねのこゑかれはしもひゝくなり　おくれしも初學抄　さはひこす　露結て霜とはなる也、非別物依天氣かはるなり、　霜こほり　霜くもり月

〔改正月令博物筌三冬〕霜朝霜、夕霜がたよりといへど、多く曉おくものなり、

〔日本書紀七景行〕十八年七月甲午、到筑紫後國御木居於高田行宮、時有僵樹長九百七十丈、百寮踏其樹而往來、時人歌曰、阿佐志毛能、瀰概能佐烏麼志、○下略

〔夫木和歌抄十四擣衣〕西園寺入道太政大臣家三十首　後九條內大臣

くれかゝるみねのゑばやのゆふしもにたれゑら雲の衣うつらん

〔改正月令博物筌九月〕秋霜あきのしも霜は冬也、暮秋に漸置初るゆへ、秋の霜、秋の初霜など云、

〔古今和歌集五秋〕白菊の花をよめる　凡河內躬恒

心あてにをらばやをらんはつ霜のおきまどはせる白菊の花

〔源氏物語三十藤袴〕九月にもなりぬ、はつ霜むすぼほれ、えんなる朝に、例のとりぐなる御うしろみどもの引そばみつゝもてまいる、

〔夫木和歌抄十四秋霜〕六百番歌合秋霜○中略　中宮權大夫家房卿

秋の野のちぐさの色もかれあへぬにつゆをきこむるよはのはつ霜

秋霜